

があるが、飼料効率、蛋白質効率、カロリー効率には差がない。今回はこの生長（体成分蓄積）の内容について調べた。

2. 飼育実験開始時に標準的幼動物を殺し、その Carcass の分析を行なっておく。次に成長実験終了後、その Carcass の分析を行ない、その実量の差引によって体成分蓄積量とその率を算出して比較検討した。

3. イ) Carcass 重量は生体重に対し、各群共に75～76%である。生体重の最も大きい β -澱粉代入群は少し低い。

ロ) 各群共 Carcass 中蛋白質は20～21%であり、イノシトール添加による差は殆んど認められない。

ハ) 脂肪の含量は15～19%でひらきがあるが、代入糖質、イノシトール添加の有無によると断定できるほどの分布ではない。

ニ) Carcass 中蛋白質および脂肪の実量は、 β -澱粉代入群がややまさる。

ホ) デキストリン代入群は見かけの成長も低く、体成分の蓄積も多少劣る。

A-39 糖質の栄養効率（第3報）

都立立川短大 唐沢 恵子

1. 混合飼料の糖質源（65.5%）として蔗糖のみの場合と、その一部（3%）に種々の糖質を代入した場合およびそれぞれにイノシトールを添加した場合の、幼動物における生長効率を比較すると、見かけの生長量には差